『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華

―残映としての『大鏡』―

福田景道

『今鏡』は『大鏡』の続編として著作された。『大鏡』の展開を主導した大宅世継の孫女を自称する語り手が、『大鏡』を時間的に継承して、世継に語り残された後一条朝以降の出来事を口述することを宣言する（「序」）。百数十歳の超老人が自己の見聞の形で歴史を物語るという設定、紀伝体に倣った組織なども明らかに『大鏡』の追随である。[1] ところが、閑雅な巻名・章名に象徴されるように、その内実はむしろ『栄花物語』に近似し、『今鏡』が継受したのは『大鏡』の外貌にすぎないと見なされる。[2] また、『大鏡』には藤原道長の空前の栄華という明瞭な焦点があって、それによって全体の統一が保たれるのに対して、『今鏡』には焦点が存在しないために散漫で単調な印象しか得られない。[3] 道長の栄華を追究するために必然的に案出された形式を無自覚に踏襲してしまったと言わざるを得ないであろう。[4] 理想化された道長のような核心を持たないままに『大鏡』の後継者を目指したところに『今鏡』の欠点の多くが集約されるのかもしれない。

しかし、『今鏡』にも道長は登場する。

かの後一条の帝、世を保たせ給ふ事二十年おはしましかば、万寿二年の後、いま十かへりの春秋は残り侍らむ。（中略）その御世より申し侍らむ[5]（「序」(上)三三頁）

この言明のもとに後一条天皇の治世二十年が『今鏡』の叙述の範囲に含まれることになるが、このうちの十二年間に道長は生存している。『大鏡』の最終年（万寿二年）の後さらに二年間存命しただけではない。『大鏡』に語り尽くされたはずの道長が続編『今鏡』にも残存する。『今鏡』は内実においても『大鏡』との接触を回避できないのである。[6]

平板単調と評される『今鏡』において、『大鏡』の焦点道長はどのように理解され、受容されたのであろうか。『今鏡』全編の統一性を考究する端緒として道長の存在が注目される。

一

『今鏡』では、後三条帝・白河院とその周辺に興趣ある逸話が多く、その治世はひときわ光彩を放つ。この時代に作者の関心は集中し、政治に対する意識は最も高揚する。[7] 後三条天皇（尊仁親王）立坊の劇的経緯が『今鏡』における「実質的に最初」の逸話であり、『今鏡』の白河院は『大鏡』の道長に相当する存在であると言われている。[8] そうすると、「本紀」（巻一「すべらぎの上」～巻三「すべらぎの下」）の世界は後三条帝の出現をもって本格的に始動すると考えられ、後一条・後朱雀・後冷泉三帝の時代と後三条朝以降とは截然と区分されているという見方が成り立つ。さらに、崇徳帝あるいは後白河院の治世以後は「この世」「今の世」と呼ばれて、「近き世」と一括される後三条帝から鳥羽院政までの期間と識別されているのも明らかである。[9] 後三条帝の皇位継承や崇徳・後白河帝の即位を契機に時代は変移し、『今鏡』に取り扱われる百数十年間に三種類の時代が交替するという歴史認識が認められるであろう。[10] この三時期区分はそのまま「すべらぎ」上・中・下の三分巻に反映するとも見なされる。[11]

時代認識は語り手の境遇にも呼応する。「序」において、紫式部に仕えて一条朝を中心に宮廷社会に参与したらしい老媼が、直接見聞した「昔」の出来事は「かたがたうけたまはる事多かりしかども、物語どもにみな侍らむ」と言って除外し、「近き世の事」を語るというのである。彼女は『今鏡』の対象となる時代（後一条朝～高倉朝）の真の体験者とは見なし難く、『今鏡』の語り手には必ずしもふさわしくない。ただし、この条件は『大鏡』にも共通する。大宅世継も夏山繁樹も藤原忠平の時代に活躍した人物であって、三世代後の道長時代を実体験してはいない。[12] 過去の人間が現在までを俯瞰するのであった。『今鏡』でも、「昔」の人が「近き世」を照射するのである。[13]

近き世の事も、おのづから伝へ聞き侍れば、おろおろ年の積りに申し侍らむ。若く侍りし昔は、しかるべき人の子など三四人生みて侍りしかど、この身のあやしさにや、みな法師になしつつ、あるは山踏みし歩きて、あともとどめ侍らざりき。あるは山籠りにて、おほかた見る世も侍らず。

ただ養ひて侍る五節命婦とて侍りし、内わたりの事も語り、世の事もくらからず申して、琴のつまならしなどして聞かせ侍るも、齢のぶる心地も侍りし、はやくかくれ侍りて。また殿守のみやつこなる男の侍るも、初冠せさせ侍りしまで養ひ立てて、この春日の里に忘れずまうで来るが、朝浄め御垣のうちにつかうまつるにつけて、この世の事も聞き侍る。

（「序」㈠三三頁）

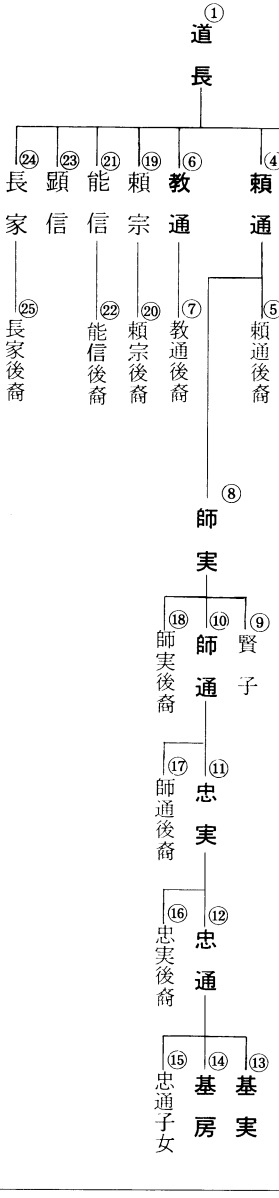
実見できない「近き世」の情報は、「内わたりの事」（宮中）にも「世の事」（貴族社会）にも詳しい養女から入

手し、その後の「この世の事」は内裏の「朝浄め」を勤める養子に聞くという設定ではないだろうか。情報採取に比較的有利なのが「近き世」ということにもなる。この「近き世」を後三条親政から鳥羽院政までの期間に該当させると、ここに『今鏡』の主眼があることが裏付けられる。紫式部に仕えて得られた歴史知識は、老媼が「本紀」「列伝」を語り終えた後に改めて「おのづから見聞き侍りし事」「伝へうけたまはりしこと」(下三七六頁)として語り続けた巻九「昔語」以下に発露すると思われる。「昔語」には清和天皇の治世から後冷泉朝までが対象となり、「近き世」と峻別されている。また、語り手自らが実見した「昔」が収載される「物語ども」(「序」)の中に『大鏡』が含まれるとすると、「昔」をほぼ『大鏡』に描かれる時代と見なして支障はないであろう。そうすると、「昔」と「近き世」との間隙に後一条朝から後冷泉朝までを意味するもう一つの「昔」が存在することになる。これは老媼の実子が「山踏み」「山籠り」の僧侶になったために情報の枯渇した期間か、あるいは紫式部没後も老媼本人が宮廷社会との繋がりを保っていた時代であろう。これを、古代中世の時代区分の通性に従って、「昔」と「近き世」の中間という意味で「中頃」と仮称しておく。[14]

「中頃」「近き世」「この世」による『今鏡』の三時期区分は、「本紀」の前提としてまず提示されたものであるが、巻四「藤波の上」以降の「列伝」五巻にも相当できる。ただし、そこに見いだせるのは時間ではなくて世代に基づく区分である。「すべらぎ」三巻(本紀)が編年史的に形成されているのに対して、「藤波」三巻・「村上の源氏」・「御子たち」は、『大鏡』を模して、系譜(系図)に従って人物が整然と配列されているからである。

巻四「藤波の上」・巻五「藤波の中」・巻六「藤波の下」前半(「ますみの影」の章まで)は、摂政・関白を独占する道長流の系図を基底に構築される。その系図に含まれる男女一六〇人余りの略歴や逸話が順次辿られる中で、師実を岐点に配列方法が一変するのがわかる[15](系図参照)。道長の男子六人とそれぞれの後裔が、倫子腹(頼通・教通)・明子腹(頼宗・能信・顕信・長家)の別に、出生順に紹介される原則が遵守されるが、頼通一門から師実の一系だけが削除されて教通後裔と頼宗との間に介入させられているのである。これは、摂関職相続の順序が配列に際して最優先された結果かもしれない。頼通から教通へは兄弟で相承された摂関職が、師実から基実までは父から子へ受け継がれていった事実に対応する。しかし、一方、道長とその子孫(師実流を除く)の列伝と師実を始祖とする一門流の列伝とが分離、併存しているとも見なせるのである(系図参照)。道長と師実は、その子女の列挙の最初に立后を果たした女子が詳述される点でも他の摂関・大臣とは弁別される。摂関の家から国母が出て一門の繁栄がもたらされたのは、『今鏡』の時代には道長女彰子・嬉子と師実養女賢子の場合だけ

『今鏡』における道長流略系図（巻四「藤波の上」～巻六「藤波の下」前半）



（注）太字は摂政・関白経験者を、○内数字は掲載順序をあらわす。

であった。

師実は「近き世の関白」と呼ばれる（巻四「藤波の上」「薄花桜」の章、㈲一三四頁）。構成上の分岐点である師実をもって「近き世」の到来を認めてよいであろう。この世代以降の人物を中心に興趣ある逸話が増加する傾向があり、作者の力点の所在がうかがわれる。[16] また、巻六「藤波の下」の後半を占める公季（閑院）流藤原氏の列伝は春宮大夫公実から実質的に始まる。巻七「村上の源氏」は俊房・顕房兄弟から記事が詳しくなる。この三人は師実と同じく白河院時代の前半に主として活躍した人物である。[17] 巻八「御子たち」は、「近き世」の起点後三条帝の女御基子とその兄弟から始まる。「列伝」五巻は例外なく、「本紀」三巻と同様に、「近き世」以降に本格化すると見なして間違いない。また、基実・基房らの最新の世代は「今の世」（「この世」）と規定されている。

さて、以上のように、「近き世」が重視される一方で、その前後に「中頃」「今の世」という比較的重要でない時代が『今鏡』の叙述の対象とされる。この期間・世代には淡白で起伏に乏しい記事が連ねられているにすぎない。巻八までの精彩に富む逸話は後三条朝から鳥羽院政までの期間、師実から忠通までの世代に集中するのである。そうすると、なぜ「近き世」の物語（あるいは近代

史）に「中頃」や「今」の叙述が含まれるのか、という疑問が生じてくる。

「今の世」「この世」の場合は、それに答える言辞が作品中に見いだせる。

今の世の事は、憚り多かるうへに、誰かはおぼつかなくおぼされむ。しかはあれども、事の続きなれば、申し侍るになむ。（巻三「すべらぎの下」「大内わたり」(上)四六二頁）

今の世の事、ことあたらしく申さでも侍るべけれど、事の続きなれば、申し侍るになむ。（巻五「藤波の中」「藤の初花」(中)二五三頁）

今の世のことは人にぞ問ひたてまつるべきを、よしなきこと申し続け侍るになむ（巻九「昔語」「葦鶴」(下)三七六頁）

このような『今鏡』特有の表現[18]によって、作品における「今」嘉応二年までの記事が機械的に継続されたことが推定できる。百数十歳の古老が自己の生きた時代の出来事を現在に至るまで語るという形式を墨守するために、嘉応二年までのことが叙述されなければならなかった。ただし、『大鏡』における万寿二年は仮構された現在であったのに、『今鏡』の嘉応二年はほぼ成立時点に重なるのである[19]。したがって、「今の世」に関する記述は現存する人物の境涯が対象となるため、「憚り」が多く、「ことあたらしく」語る必要がないのであろう。「今の世」の出来事（現代史）を語ることに『今鏡』の主旨はもはやない。

「中頃」にも、『大鏡』を時間的に継承して通史を完成させる以上の意味はないのかもしれない。『大鏡』を忠実に踏襲し、継承するために、あえて万寿二年以降の四十年余が対象に加えられただけなのかもしれない。しかし、ここには「近き世」「この世」とは本質的に異なる点が見いだせる。本稿の論点に関連させると、後一条・後朱雀・後冷泉の三代は、道長や頼通・教通の世代によって摂関政治体制（外戚政治）の維持された期間で、後三条帝の親政に端を発する院政期とは画然と区分される[20]。師実は院政に協力的な態度をとっていたとされる[21]。「近き世」が新時代として注目される根拠はここにもある。一方、「中頃」が道長の外孫以外の天皇が存在せず、道長の子息のみが政界を領導する時代であったのは言うまでもない。

二

『今鏡』の「中頃」の性格を考えるとき、軽視できないのが『弥世継』という作品である。『弥世継』は、早く散佚したらしいが、『本朝書籍目録』から二巻本であることが知られ、『増鏡』によってその内容がある程度推定できる。『増鏡』の序文には、『水鏡』『大鏡』『栄花物語』『今鏡』の概要が紹介された後に、

まことや、いや世継は、隆信の朝臣の、後鳥羽院の

位の御ほどまでをしるしたるとぞ見え侍し。その後の事なん、いとおぼつかなくなりにけり。[22]（二四九頁）

と述べられていて、語り手の老尼が「事のつゞき」として後鳥羽院以降の時代を語る根拠になる。同時にこれは『増鏡』が後鳥羽院に起筆されることの表面上は唯一の根拠になっている。後鳥羽院を冒頭にもつことは、その生涯を倒幕運動と隠岐配流に代表させて、末尾の中心人物後醍醐帝の類似した境遇に対応させるのを可能にし、さらに前者の宿願を後者が達成する構図によって一編の首尾を照応させる。[23]これによって、『増鏡』の世界は強固に統一されるのである。後鳥羽院起筆は偶然ではなく必然だった。もし純粋に『弥世継』の後を補うのであれば、後鳥羽帝の次の土御門帝から始めるべきであったかもしれない。[24]「後鳥羽院の位の御ほどまで」はすでに記されているのである。

また、『弥世継』は『栄花物語』や四鏡と同列に扱われるような完成された作品であったとは思われない。『増鏡』に言われる隆信が作者であるとすると、[25]彼は『弥世継』の叙述の対象になるはずの高倉・安徳・後鳥羽朝に生きた人物であって、[26]『弥世継』は作者にとって同時代史であったことになる。『今鏡』の「今の世」と同様に活力に乏しい内容が予想される。さらに言えば、『今鏡』の後を補って嘉応二年からの記事があるとすれば後鳥羽院譲位までにわずか二十八年間の歴史叙述しか期待できない。他の歴史物語に比べて異様に短いであろう。[27]『弥世継』は、『増鏡』に尊重され、継承に値する作品だったとは思われないのである。散佚するにはそれだけの理由があったのではないだろうか。[28]

そうすると、『増鏡』は『今鏡』の後を補うべきだったかもしれない。『栄花物語』に叙述された時代を『大鏡』が再び対象としたように、『弥世継』と同一の時代を後世の視座によって把捉しなおして、『弥世継』を鏡物の正系から除外することも可能だったのである。『水鏡』『大鏡』『今鏡』『増鏡』の四鏡の連続で神武から「現代」までの通史が提供されるのは自然な姿であろう。しかし、『増鏡』作者はそれを欲しなかった。鏡物の連鎖による「日本通史」の完成よりも、自己の作品の文芸的完成を望んだことになる。つまり、『弥世継』は、それ自体としては多くを期待できないが、『増鏡』の全体の統一性や文芸的価値の面に大きく貢献している。『今鏡』と『増鏡』との間に約十年間の空白（嘉応二年以後の高倉朝とそれに続く安徳朝）を生んだ一点にこそ『弥世継』存在の意義が認められるのである。

さて、『今鏡』の主眼が「近き世」の描出にあるとすれば、「中頃」は、この『弥世継』に記載されたはずの時代に該当する。『今鏡』の「中頃」は、『増鏡』における『弥世継』の位置にある。そうすると、『今鏡』の作者が「物語」作者であるなら、自己の作品から「中頃」を排除しなければならなかった。それが不可能でも、「中

頃」の叙述を極力簡潔にして作品の統一を図るべきであった。そうしなかったのは、『今鏡』が『大鏡』の継承を第一目的として成立したからであろう。ここに『大鏡』や『増鏡』に比べて、『今鏡』の文芸としての評価が低いことの一因がある。『大鏡』の対象年代が道長の栄華を規準にして必然的に選定され、『弥世継』の分離によって『増鏡』が統一されたのに対して、『今鏡』は「中頃」を包含したために散漫にならざるを得なかったと言える。

しかし、それだけですべてが了解されるのではない。『今鏡』の「中頃」には『増鏡』に対する『弥世継』とは異なる性格・条件も少なからず見いだせるのである。「中頃」は、「近き世」の叙述には不要かもしれないが、『今鏡』には必要不可欠だったので看過されなかったとも考えられる。その点では、むしろ『大鏡』に冬嗣・良房・良相・長良の簡略すぎる四伝が実質的始原「基経伝」の前に設置され、文徳・清和・陽成三帝の「紀」が正統の始祖光孝帝の前に存在するのに類似している。これらの場合は、冬嗣流藤原氏の「正系」を峻別する原則を典型的に例示するためのものであり[29]、傍系天皇の皇統の衰滅と対比して「正統」の優越を相対的に際立せる意図に応ずると見なせる[30]。作品の目的そのものではないが、目的の達成に確実に寄与するのである。ただし、類似はするが、『今鏡』の「中頃」にはそれ以上の機能が潜在するように思われる。『大鏡』の場合と隔絶して、「中頃」は『今鏡』の対象とする期間と記述量の三分の一近くを占有する長さと規模をもつ。『弥世継』の対象期間をもはるかに上回る。また、『大鏡』を成立せしめた道長の盛容が、『大鏡』に直続するこの時代に影響を及ぼさないはずはないであろう。

三

「中頃」から「近き世」への変転は、道長が築き上げた政治体制（歴代天皇との外戚関係締結に基づく摂関政治体制）の崩壊という歴史的事実によるだけではない。『大鏡』世界の延長線上にある時代が終息し、新しい秩序に律せられる時代が展開することを意味すると思われる。

「中頃」の三帝は道長の外孫であるだけでなく、その存在が『大鏡』の叙述から窺知される点で「近き世」以降の諸帝と区別できる。後一条帝は『大鏡』においてすでに即位しているし、後朱雀帝は東宮位にあって即位は当為のこととされる。さらに、後冷泉帝は腹中にあって、

入道殿（道長）の御ありさまみたてまつるに、かならずをのこにてぞおはしまさん。このおきな（大宅世継）、さらによも申あやまちはべらじ[31]（「道長伝(上)」二〇六頁）

と、その治世までが予祝されるのである。男皇子に意義があるのは、帝位継承が可能であるからにほかならない。

それに対して、後三条帝の治世は、母禎子内親王が国母（女院）になるという夢告によって間接的に予知できるが（『大鏡』「藤氏物語」二四九頁）、この夢告は道長外孫禎子の繁栄の称揚であって、道長家と外戚関係の成立しない後三条帝に関する記述とは見なし難い。[32] まして、白河・鳥羽・崇徳帝の三代にわたって閑院流が外戚の権を獲得する事実は、『大鏡』からは毫も予測できない。[33]

また、村上源氏の興隆は予言されるが、顕房の外孫堀河帝の即位を示す徴候は見いだせないのである。

「列伝」においても『大鏡』の影は「近き世」までは及ばない。すなわち、『大鏡』に記載されるのは師実の異母兄通房までで、師実は無視されるのである。道長の嫡孫として「よをひゞかす」通房が誕生した際の道長自身の詠歌と、「孫のおさ」であるゆえに「長君」と命名されたことが記されて、道長の嫡流が「道たえずすぐれ給へる」と予祝されている（「藤氏物語」二三二・二三三頁）が、『大鏡』の予知はここまでで、実際に家督を相続した師実にまでは筆が及ばない。通房が早世して弟の師実に摂関職と氏長者の地位がもたらされた事実の予想は不可能であろう。『大鏡』においても師実は時代区分の分岐点になる。『大鏡』世界の未来への射程は、後冷泉帝・禎子・通房まで、つまり『今鏡』世界の「中頃」までであった。「中頃」には『大鏡』の人物が再登場するが、「近き世」にはそれがない。たとえば、『大鏡』に公季の孫公成や曾孫資綱の存在は明記されるのに（「公季伝」）、四世の孫公実の名は確認できない。村上源氏で登場するのは師房だけで（「道長伝」）、俊房・顕房は片鱗さえ見せないのである。

こうして、「中頃」が『大鏡』と重複する時代であるとすると、道長の「中頃」における影響力も軽視できないものになる。『今鏡』の「列伝」は、次のように道長から始まる。

> 世継は、入道太政大臣（道長）の御栄えを申さむとて、その御事細かに申したれば、その後より申すべけれど、水上あらはれぬは、流れのおぼつかなければ、まづ入道大臣の御有様おろおろ申し侍るべきなり。（巻四「藤波の上」「藤波」㈠二五頁）

ここに、重複をいとわず道長の「有様」が語られることが予告されている。しかし、それにもかかわらず、道長本人を伝える記述はほとんどないのである。

> 入道前太政大臣道長のおとどは、大入道殿（兼家）の五郎、九条の右の大臣（師輔）の御孫なり。一条院、三条院、後一条院、三代の関白におはします。五十四の御年、御髪おろさせ給ひて、万寿四年十二月四日六十二にてかくれさせ給ふ。（同）

「列伝」中の道長個人の記事はこの数行に尽きる。以下には丹念に道長の子女・裔孫の経歴が綴られる。『今鏡』でも、『大鏡』と同じく、「有様」とは本人のことよりも後裔の様態を意味するのである。[34] また、道長の十二人の子女の略述が「昔も今も、かかる御栄えはありがた

きなるべし。」（「藤波」㈲二六頁）と締めくくられることから、「栄え」とは一個人の栄達・幸福ではなく、子孫の繁栄に関して言われる傾向が看取できる。これも『大鏡』の「栄花」観に等しく[35]、『今鏡』が『大鏡』の続編であることが了解される。

したがって、道長流の系図から成る「藤波」三巻の大部分は、『大鏡』を受け継いで道長の栄華を証明するものと見なしてもよいであろう。ところが、『今鏡』において子孫の広範な繁栄が極度に賛仰されるのは道長だけではない。「近き世の関白」師実も、女子をもてなかったにもかかわらず、末裔まで顕栄が永続する点が再三強調されている。「末栄えさせ給ふことも、すぐれておはしましし か。」（巻四「藤波の上」「薄花桜」㈲一三四頁）、「末広くおはします」（同「波の上の杯」㈲一四九頁）などと称賛される。「大殿（師実）の御末こそは、一の人つがせ給ふめれ。」（同「伏見の雪のあした」㈲五三頁）という評言もある[36]。

「薄花桜」（巻四「藤波の上」）に師実が登場してから「故郷の花の色」の章（巻五「藤波の中」巻末）が「おほかた男君十五六ばかりやおはしましけむ。」（㈲三九七頁）と結ばれるまでが、師実とその後裔の記事で占められている。この「藤波」三巻三十一章のうち十三章に相当する部分が、『大鏡』の構成方法[37]に基づくと「師実伝」と呼ばれるべきである。したがって、『今鏡』の師実は、「列伝」組織上の分岐点であるだけではなく、道長と並んで、繁栄・分派する一族の始祖として位置づけられていることになる。「藤波の下」巻前半までが「道長伝」と「師実伝」で成り立つというのはこういう意味なのである。

このように考えると、「列伝」の「近き世」「今の世」が師実以降の世代に主導され、師実一門が繁栄する時代であるのに対して、「中頃」は道長とその子孫の勢威の盛んな時代ということにもなる。「藤波の下」後半（閑院流の列伝）・「村上の源氏」・「御子たち」には「中頃」への言及がほとんど見いだせないからである。

同様のことは「本紀」にも指摘できる。「中頃」が対象とされる「すべらぎの上」巻には、「本紀」でありながら道長一家に関する記載が際立って多い。「列伝」になかった道長本人の経歴もここに辿られる。道長の摂政辞任、省試の詩題献上、二度の受戒、無量寿院造営、法成寺金堂落慶のことなどが縷述され（「雲居」）、病悩と死去までが「本紀」に語られるのである（「子の日」）。道長の子女に関しても、威子立后による「三后並立」が「いと類なき御栄えなるべし」と称賛されるのをはじめ、嬉子の死後の栄誉が賛嘆され（以上「雲居」）、後一条・後朱雀両帝の外家が道長家であるだけでなく彰子の孫（道長曾孫）二人が帝（後冷泉帝）・東宮（後三条帝）であることが強調される（「星合」）。以上を踏まえて、道長の外戚関係締結の成功、すなわち子孫の空前の繁栄が「昔もかかる類やは侍りけむ。」（「子の日」㈳七八頁）

と、『大鏡』とまったく同様に賛美されるのが『今鏡』「本紀」の「中頃」なのである。

四

「源を知りぬれば、末の流れ聞くに心汲まれ侍り。」（「序」㈠三三頁）ということから、後三条帝ではなくて後一条帝から『今鏡』の歴史叙述は始まった。「水上あらはれぬは、流れのおぼつかなければ」（巻四「藤波の上」「藤波」㈢二五頁）という理由で語られたのが道長の「有様」すなわち後裔の系譜であった。「流れ」（現状）の理解のために「源」や「水上」を窮めなければならないと認識されている。[38] ここに言う「源」「水上」とは、後一条帝でも、道長でも、万寿二年でもない。それは「中頃」における道長の栄華（一門の隆盛）であり、同時に『大鏡』世界そのものであった。これは『大鏡』の「ながれをくみてみなもとをたづねてこそはよく侍べき」（「大臣列伝序」六三頁）に基づく考えであろうが、『今鏡』の姿勢は『大鏡』のそれと同一ではあり得ない。『大鏡』の場合はまず「流れ」がある。結果から原因に遡及するという趣旨が表出されている。事実、『大鏡』には、道長の栄華が厳然たる現実（結果）として認定されていて、その源泉が文徳天皇、藤原冬嗣、鎌足に求められる、あるいは光孝帝と基経の関係や忠平の栄華に求められる傾向が顕著にある。[39] 言い換えると、『大鏡』には原因であるはずのものを結果が規定する一面があって、真の因果関係が成立するとは見なし難いのである。[40]

それに反して、『今鏡』は道長の栄華が因由になって「近き世」「この世」の現実がもたらされたと判断する。後三条帝即位以後の新体制も道長の子孫の繁栄する時代には違いない。後三条帝の母后陽明門院禎子について「この女院の御母、皇太后宮妍子と申すは、御堂の入道殿（道長）の第二の御むすめなり。」（巻二「すべらぎの中」「御法の師」㈠二四一頁）とわざわざ付記されている。道長の成功がなければ白河院や師実の権勢はないし、後白河院政や摂政基房もあり得ないのである。村上源氏も、道長の子孫として、もしくは道長流藤原氏と一体化することで賛仰される。[41] これは『大鏡』に見られる道長の源藤融合策[42]を受け継ぐ。村上源氏の始祖師房が、頼通の養子ではなくて道長の養子とされるのは、『大鏡』と『今鏡』だけである。

『今鏡』は、『大鏡』で称賛された道長の栄華の不朽なることの証拠でもあった。『大鏡』の本旨が道長の栄華の由来・過程の究明にあったため、[43] 略記されるにとどまった栄華の実相（子孫の空前の繁栄）が『今鏡』において顕現したことになる。

また、「中頃」に道長の栄華への直接的な言及があるのに対して、「近き世」では道長が間接的に追求されると考えられる。ここで価値が認められるのは、道長と同様の立場であり、道長と同型の人間である。師実が子孫

の繁栄によって道長の後継者となるなら、師通は道長の豪胆な性格を受け継ぎ（巻二「すべらぎの中」「紅葉の御狩」）、道長の「古き跡」を復活させる（巻四「藤波の上」「波の上の杯」）。『大鏡』では、道長が末弟でありながら二兄の頓死によって政権を掌握したのを道長の宿運によるとされるが（「道長伝（上）」末尾）、それに類似して、『今鏡』でも師実の「御報におされて」兄通房が早世し（巻四「藤波の上」「伏見の雪のあした」）、基実の短命も弟基房の「御報」のためと見なされている（巻五「藤波の中」「藤の初花」）。忠通に対する賛辞には『大鏡』の道長に通じるものがあり、忠通の長期政権が道長のそれに比定されているという見方もある[44]。『大鏡』の道長は、子孫の顕栄と並んで、廟堂を領導する期間の長さで古今の有力者を上回るからである[45]。また、村上源氏が道長の子孫と見なされるのに対して、閑院流の締結した皇統との重層的な外戚関係は、『大鏡』の九条流の発展の再現とも考えられる。ここにも道長の理想性の一端が分与されていることになる。したがって、『今鏡』の「列伝」はすべて道長の影響下にあるとも言える。

『今鏡』に顕著な文化・文芸・芸能を尊重する態度は[46]、『大鏡』の道長が「おほかた、さいはひおはしまさん人の、和歌のみちをくれたまへらんは、ことのはへなくやはべらまし。」（「道長伝（上）」二一六頁）ということから詩歌の才能が称賛されたことの延長とも見なせる。家格の回定化や家業観念の形成がすすむ[47]『今鏡』の時代にあって、道長のように多方面に抜きんでるのは難しかったのかもしれない。また、家格によって、個人の努力で栄達できる範囲が限定されていたために、才能を発揮する道は文化面にしか残されていなかったのかもしれない。『今鏡』に『大鏡』の政治的側面よりも文化的側面がより多く継承された一因に、このような時代の変遷の現実が考えられるのではないだろうか。とにかく、『今鏡』は『大鏡』に理想化された道長の文化人としての才能をみごとに継受しているのである。『今鏡』にもう一つ顕著な尚古思想[48]に『大鏡』の世界や道長を志向する一面があるのも否定できない。これら『今鏡』の特性は、当時の社会現象を忠実に反映するものではあるが、そこには『大鏡』における道長の影響もたしかに見いだせるであろう。

『今鏡』の作者は、道長を追求し続けてついに果たせなかったのかもしれない。『大鏡』にも描かれなかった道長の栄華の偉容を「中頃」に再確認し、さらに「近き世」や「今の世」も道長の再来を期待し、道長の栄華の再構築を目指したが、それは時代が許さなかった。しかし、この意図によって『今鏡』に統一性が付与されるとも言える。道長の存在とその栄華は『今鏡』の世界を決定的に覆い尽くす。道長の血統を受け継がない天皇も摂政・関白も、王朝貴族の発想では永久に現れないのである。

注

（1）　関根正直氏「総説」（同氏著『今鏡証註』六合館、明

治三十年刊。同氏著『今鏡新註』〈六合館、昭和二年刊〉に再録)、池田亀鑑氏「前田本今鏡解説」(石黒文吉氏『前田本今鏡』尊経閣叢刊、前田家育徳財団、昭和十四年刊)、板橋倫行氏「解説」(同氏校註『今鏡』日本古典全書、朝日新聞社、昭和二十五年刊)など参照。

(2) 多賀宗隼氏「大鏡私見——平安朝の歴史叙述——」(『史学雑誌』第五十三編第八号、昭和十七年八月)参照。

(3) 池田亀鑑氏前掲解説(1)、海野泰男氏「『今鏡』の人物描写——頼宗流の人々をめぐって——」(『常葉国文』第三号、昭和五十三年六月)、山内益次郎氏著『今鏡の研究』(桜楓社、昭和五十五年刊)一四一頁など参照。

(4) 多賀宗隼氏前掲論文(2)、山口康助氏「今鏡作者攷」(『国語と国文学』第二十九巻第六号、昭和二十七年六月)、加納重文氏「鏡物における『今鏡』の位置」(山岸徳平氏他編『大鏡・増鏡』鑑賞日本古典文学第十四巻、角川書店、昭和五十一年刊)、海野泰男氏前掲論文(3)など参照。

(5) 『今鏡』の引用は、竹鼻績氏著『今鏡(上・中・下)』(講談社学術文庫、昭和五十九年刊)による。ただし( )によって適宜補足説明を加えることがある。

(6) 巻九「昔語」・巻十「打聞」は清和天皇時代に遡り、さらに『大鏡』と重複する。

(7) 加納重文氏「今鏡の世界——今鏡の政治意識の所在とその解明——」(『国語国文』第三十七巻第六号、昭和四十三年六月)、海野泰男氏「『司召し』の巻について——『今鏡』小論——」(『常葉女子短期大学紀要』第八号、昭和五十一年十二月)、同氏「『宇治の川瀬』の巻について——『今鏡』小論(二)——」同第九号、昭和五十二年十二月)など参照。

(8) 加納重文氏前掲論文(7)。

(9) 遠藤静子氏「『今鏡』の著作意図」(『文芸論叢』第五号、昭和四十四年二月)、山内益次郎氏著前掲書(3)九九頁など参照。

(10) 『今鏡』における時代区分の詳細については別に論じる。

(11) 松園宣郎氏「『今鏡』小考(一)——序とすべらぎの巻を中心に——」(『東洋大学短期大学紀要』第八号、昭和五十二年三月)、同氏「『今鏡』試考」(同第九号、昭和五十三年三月)、同氏「『今鏡』について」(『東洋』第十五巻第六・七号、昭和五十三年六・七月)など参照。

(12) 拙稿「『大鏡』における藤原忠平の栄華」(『日本文芸論稿』第十二・十三合併号、昭和五十八年七月)参照。

(13) 遠藤静子氏前掲論文(9)参照。
なお、『栄花物語』も「近き世」を対象とする歴史物語である。笠井昌昭氏「『大鏡』の歴史観」(『日本思想史学』第四号、昭和四十七年九月。同氏著『古代日本の精神風土』〈へりかん社、平成元年刊〉に再録)参照。

(14) 『今鏡』における「中頃」の範囲は一定しないが、「昔」や「近き世」とは明らかに区別されている。彰子・禎子が「中頃の后」と呼ばれ(下)四七七頁)、後一条朝や

後朱雀朝が中頃に含まれることは想定できる。海野泰男氏著『今鏡全釈下』（福武書店、昭和五十八年刊）四四五頁など参照。時代区分については野村卓美氏「『発心集』の時代意識」（『国語と国文学』第六十一巻第十二号、昭和五十九年十二月）参照。

(15) 松園宣郎氏「『今鏡』私考――列伝の巻々を中心に――」（『文学論藻』第五十二号、昭和五十二年十二月）参照。

(16) （15）に同じ。

(17) 師実は長久三（一〇四二）年、公実は天喜元（一〇五三）年、俊房は長元八（一〇三五）年、顕房は長暦元（一〇三七）年に誕生した。師実は白河院の親政から院政初期まで摂政・関白を勤め、俊房・顕房・公実はそれぞれ左大臣・右大臣・大納言として白河院政を支えた。

(18) 大木正義氏「歴史物語の筆づかい二題」（『解釈』第三十一巻第七号）参照。

(19) 『今鏡』の成立時期は、嘉応二年成立説と嘉応二年を仮託としてそれ以後に成立したとする説とに大別されるが、後者としても嘉応二（一一七〇）年からそれほど下らないだろうというのが大勢である。畠山本の奥書を信用すれば、承安五（一一七五）年までに成立していたことになる。最近に至る諸説は、海野泰男氏「解説」（『今鏡全釈上』福武書店、昭和五十七年刊）、竹鼻績氏「解説――付『今鏡』の成立について」（『今鏡（下）』前掲〈5〉）参照。

(20) （7）に同じ。

(21) 石井進氏「院政の成立」（井上光貞氏他編『原始・古代』日本歴史大系1、山川出版社、昭和五十九年刊）。

(22) 『増鏡』の引用は時枝誠記氏・木藤才蔵氏校注「増鏡」（『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、岩波書店、昭和四十年刊）による。

(23) 和田英松氏「増鏡の研究」（『日本文学講座』第三巻、改造社、昭和九年二月）、加納重文氏「『増鏡』の思想」（『古代文化』第二十八巻第六・七号、昭和五十一年六・七月）、木藤才蔵氏「増鏡の構想と叙述」（『国語と国文学』第三十八巻第六号、昭和三十六年六月。同氏著『中世文学試論』〈明治書院、昭和五十九年刊〉に再録）、西沢正二氏「『増鏡』に関する一試論――後醍醐帝の物語をめぐって――」（『日本文芸論稿』第三号、昭和四十五年六月。同氏著『「増鏡」研究序説』〈桜楓社、昭和五十七年刊〉に再録）、拙稿「『増鏡』の世界――「皇位継承」の意義をめぐって――」（『日本文芸論叢』第二号、昭和五十八年三月）など参照。

(24) ただし、後鳥羽院の実権は承久の乱まで維持されたと考えられるので、譲位後も二十三年間は後鳥羽院時代と見なせる。

(25) 隆信は『今鏡』作者として有力な藤原為経（寂超）の子息で、「世継」の作者の可能性はあるが、『弥世継』を著作したという傍証はない。また、『増鏡』の記述をすべて信用することはできない。岩橋小弥太氏「世継考」

（『上代史籍の研究　第二集』吉川弘文館、昭和三十三年刊）参照。

(26) 隆信は、後鳥羽院譲位の八年後、元久二（一二〇五）年に六十四歳で没している。

(27) 和田英松氏は『弥世継』について「この書は今は伝はらねど、大鏡、今鏡などにならひて、序文をそへ、今鏡、増鏡の如く、編名を附したるものなるべく、その内容も、主として平清盛一族の事を記したるものならん。」（同氏著『本朝書籍目録考証』明治書院、昭和十一年刊）と推定するが、その根拠は示されない。

(28) 『弥世継』が実在していたことは疑えないとしても、『増鏡』に記される作者や対象とされる期間は再考の余地があるかもしれない。

(29) （12）に同じ。

(30) 拙稿「『大鏡』の構想と皇位継承過程――「正統」の確定と顕在化――」（『島大国文』第十七号、昭和六十三年十一月）参照。

(31) 『大鏡』の引用は松村博司氏校注『大鏡』（日本古典文学大系21、岩波書店、昭和三十五年刊）による。ただし（　）内の補足説明は論者が加えた。

(32) 「外戚」は外祖父と外伯叔父に限定される。土田直鎮氏「摂関政治の特質」（前掲書〈21〉）など参照。

(33) （30）に同じ。

(34) 拙稿「『大鏡』「大臣列伝」における栄華の実現――外戚関係と子孫繁栄――」（『日本文芸論叢』第一号、昭和五十七年三月）参照。

(35) 芳賀矢一氏「歴史物語」（『芳賀矢一遺著』冨山房、昭和三年刊）、増淵勝一氏「大鏡の歴史性――道長の栄花の由来とその実体――」（『立正女子大学短期大学部研究紀要』第十四号、昭和四十五年十二月）、松村博司氏著『栄花物語全注釈（三）』（角川書店、昭和四十七年刊）二〇〇頁など参照。

(36) 子孫が一の人を独占するのは師実に限られることではない。兼家・道長・師通・忠実・忠通、あるいは師輔・頼通らにも十分言えることである。ここに、『今鏡』における師実重視の立場が露呈している。

(37) 松本治久氏「大鏡『大臣列伝』の逸話の配列」（『平安朝文学研究』第二巻第五号、昭和四十三年五月。同氏著『大鏡の構成』〈桜楓社、昭和四十四年刊〉に再録）参照。

(38) 松本新八郎氏「歴史物語と史論」（岩波講座『日本文学史』第六巻「中世」昭和三十四年四月）、多賀宗隼氏「今鏡試論」（『史学雑誌』第八十三編第二号、昭和四十九年二月）など参照。

(39) 拙稿（12）・（30）参照。

(40) 拙稿「『大鏡』「大臣列伝」の考察――冬嗣流藤原氏「正系」決定過程をめぐって――」（『論叢』第三十五号、昭和六十年三月）参照。

(41) 山内益次郎氏著前掲書（3）一五四～一五七頁、小島孝之氏「今鏡の世界・序説――「村上の源氏」第七の場

合――」（『立教大学日本文学』第四十六号、昭和五十六年七月）など参照。

(42) 橘健二氏校注・訳『大鏡』（日本古典文学全集20、小学館、昭和四十九年刊）三〇八・三一〇頁頭注参照。

(43) 拙稿「『大鏡』の編年史的側面――『栄花物語』の克服と追認――」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第二十二巻第二号、昭和六十三年十二月）参照。

(44) 山内益次郎氏著前掲書（3）一四二頁。

(45) 拙稿「『大鏡』における藤原道長の理想性・序説――栄華の相対的評価をめぐって――」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第二十三巻第二号、平成元年十二月刊行予定）参照。

(46) 板橋倫行氏前掲解説（1）、松村博司氏「今鏡」（同氏著『歴史物語』塙書房、昭和三十六年刊）など参照。

(47) 大隅和雄氏「愚管抄における『家』の観念」（『季刊日本思想史』第一号、昭和五十一年七月。同氏著『愚管抄を読む――中世日本の歴史観――』〈平凡社、昭和六十一年刊〉に再録）、橋本義彦氏「貴族政権の政治構造」（岩波講座『日本歴史』4「古代4」昭和五十一年八月。同氏著『平安貴族』〈平凡社、昭和六十一年刊〉に再録）、佐藤進一氏著『日本の中世国家』（岩波書店、昭和五十八年刊）四一～六二頁など参照。

(48) （46）に同じ。

（本学助教授）